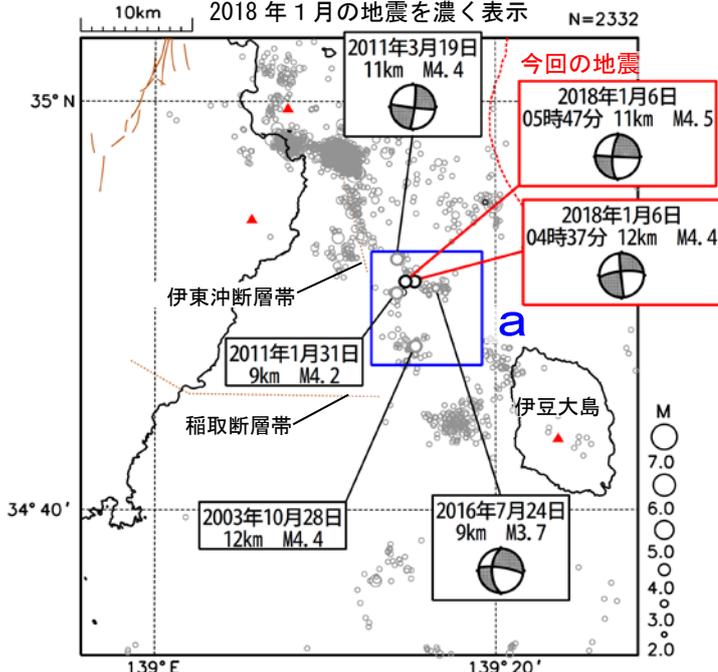


1月6日 伊豆半島東方沖の地震

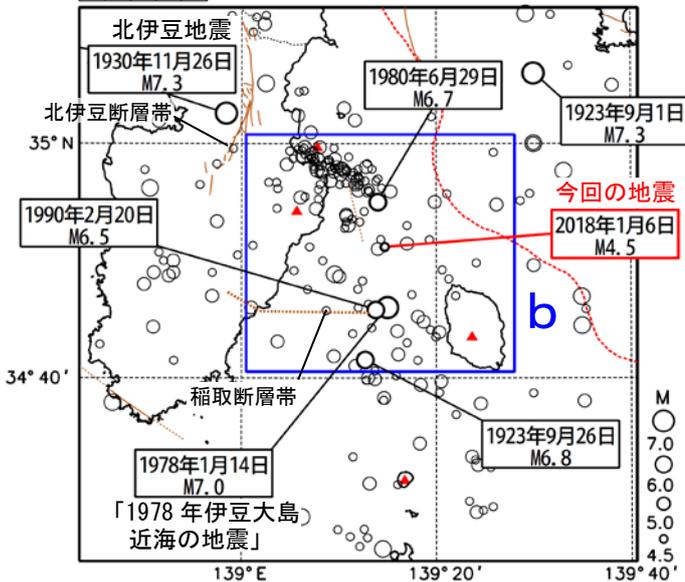
※情報発表に用いた震央地名は「伊豆大島近海」である。

震央分布図 (1997年10月1日~2018年1月8日、
深さ0~20km、 $M \geq 2.0$)



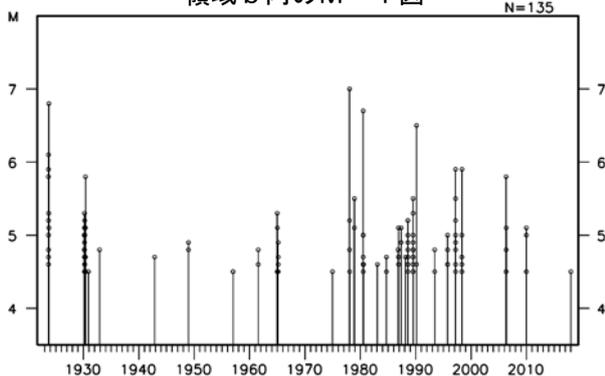
図中の細線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す
※▲は活火山を示す

震央分布図 (1923年1月1日~2018年1月8日、
深さ0~50km、 $M \geq 4.5$)



図中の細線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す

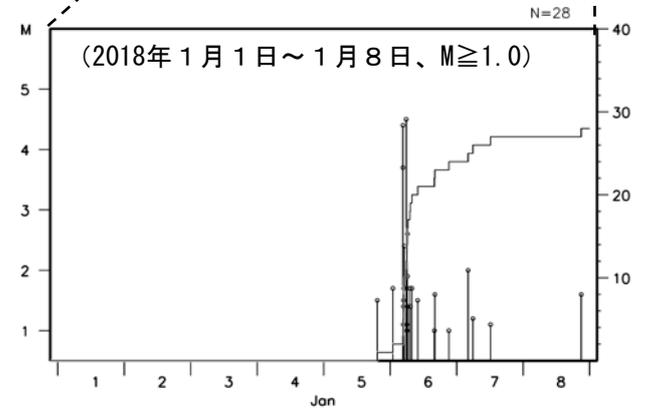
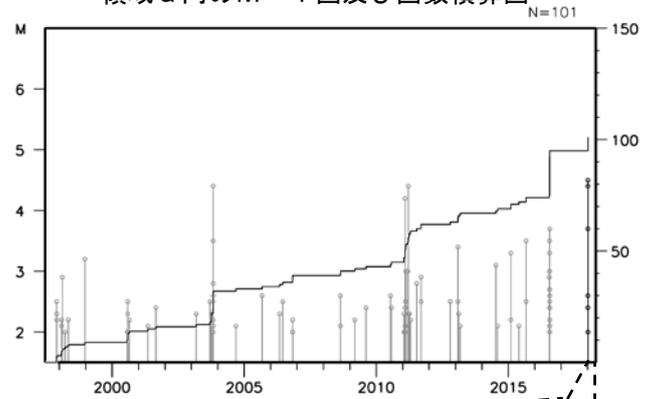
領域b内のM-T図



2018年1月6日05時47分に伊豆半島東方沖の深さ11kmでM4.5の地震(最大震度3)が発生した。この地震はフィリピン海プレートの地殻内で発生したもので、発震機構は北西-南東方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型であった。また、同日04時37分にM4.4の地震(最大震度3)が発生するなど、今回の地震の発生前後には、地震活動がやや活発となった。

1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震央付近(領域a)では、2003年、2011年、2016年にもやや活発な地震活動がみられている。

領域a内のM-T図及び回数積算図



1923年1月以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺(領域b)では、M6.5以上の地震が4回発生している。最大規模の地震は、稲取断層帯の最新の活動である「1978年伊豆大島近海の地震」のM7.0で、この地震により、伊豆半島で死者25人、負傷者211人、住家全壊96棟等の被害が生じた(「日本被害地震総覧」による)。また、伊豆大島岡田で70cm(最大全振幅)等の津波が観測された(「験震時報第43巻」による)。

1月10日 ホンジュラス北方の地震

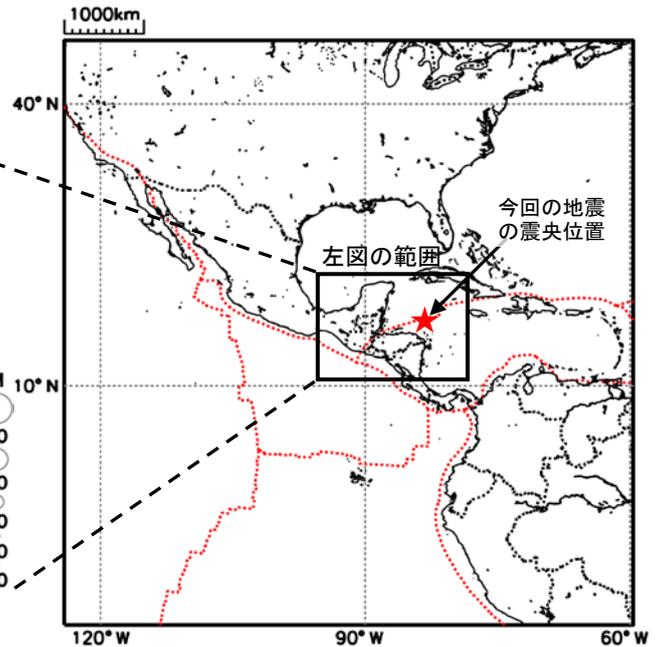
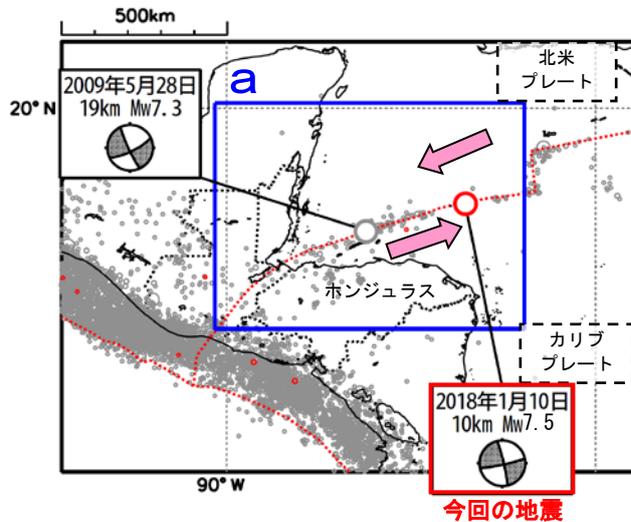
2018年1月10日11時51分（日本時間、以下同じ）にホンジュラス北方の深さ10kmでMw7.5の地震が発生した。この地震は発震機構（気象庁によるCMT解）が西北西-東南東方向に張力軸を持つ横ずれ断層型で、北米プレートとカリブプレートの境界で発生した。

気象庁は、この地震に対して、同日12時18分に遠地地震に関する情報（日本への津波の影響なし）を発表した。この地震により現地で微弱な津波を観測した。

2000年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域a）で、2009年5月28日に発生したMw7.3の地震では、死者7人等の被害が生じている。

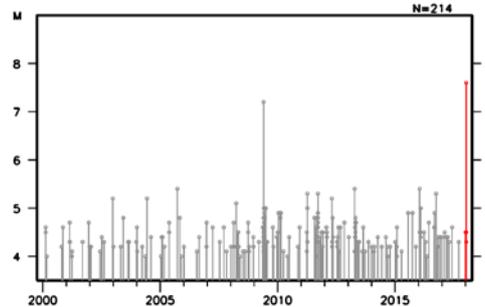
1900年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域b）では、M7.0以上の地震が時々発生し、周辺で被害をもたらしている。1976年2月4日のMw7.5の地震では、グアテマラで死者2万人以上の死者が生じた。また、2010年1月13日のMw7.1の地震では、ハイチで死者30万人以上の死者が生じた。

震央分布図
(2000年1月1日~2018年1月10日14時00分、
深さ0~100km、M \geq 4.0)
2018年1月の地震を赤く表示

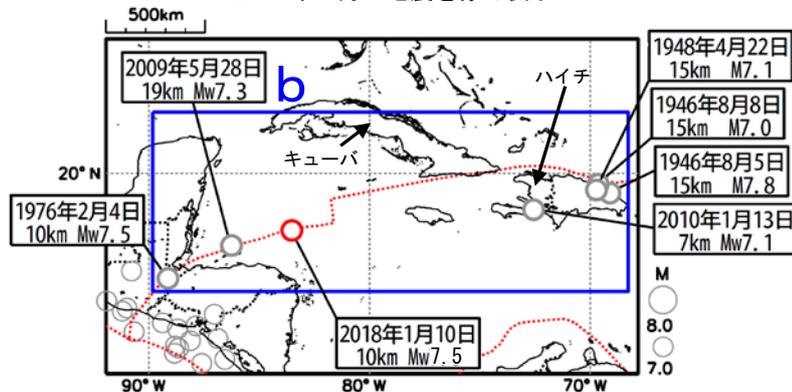


--- プレート境界の位置
← プレートの進行方向

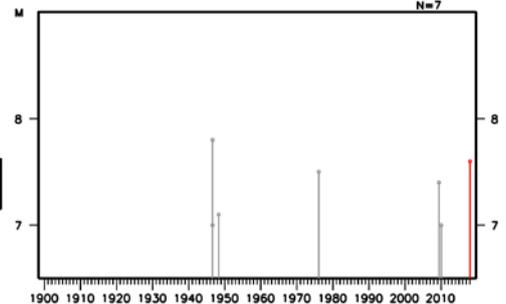
領域a内のM-T図



震央分布図
(1900年1月1日~2018年1月10日14時00分、
深さ0~100km、M \geq 7.0)
2018年1月の地震を赤く表示



領域b内のM-T図



※本資料中、(上図) 今回の地震と2009年5月28日の地震の発震機構とMwは気象庁、震源要素は米国地質調査所(USGS)による。(下図) 今回の地震と2009年5月28日の地震、2010年1月13日の地震のMwは気象庁、1900年~2013年の震源要素は国際地震センター(ISCHEM)、2014年以降の震源要素はUSGSによる。今回の地震の津波の高さは、太平洋津波警報センター(PTWC)による。過去の地震の被害は、宇津の「世界の被害地震の表」による。プレート境界の位置と進行方向はBird(2003)*より引用。

* 参考文献 Bird, P. (2003) An updated digital model of plate boundaries, *Geochemistry Geophysics Geosystems*, 4(3), 1027, doi:10.1029/2001GC000252.